

学習の基盤となる資質・能力の育成に向けては、今後も、様々な教育学等の知見を結集して、専門的な検討がなされていくと思うが、それに際し、教育の最前線である学校現場を身近に支援する立場から大きく3点申し上げたい。

1点目は、「学習の基盤となる資質・能力の育成」が、画餅に帰すことのないよう、学校現場が理解し、腹落ちし、日々の実践に落とし込まれるようにするための検討である。内容面と方法面の両面で申し上げる。

- ・内容面では、学習指導要領において、言語能力、情報活用能力とはどのような資質・能力であり、各教科等の中で、どのような内容や学習活動を通して育成していくのかという、そのゴールや発達に応じた内容の系統、方法の大筋を明らかにすべきであること。

- ・方法面としては、国の指導資料、あるいは教科書、副教材などで明確に示し、各学校、教師が創意工夫しながら、子供が主語となる単元デザインを行い、一コマ一コマの授業に落とし込んで、指導と評価の一体化に臨むことができるような環境をつくること、これを徹底することが大切と考える。当然、学校現場の創意工夫は大切であるが、公教育において、全国一律の一定の共通性を担保していく視点も併せて重要と考える。

2点目は、子供たちが学ぶ内容や時間には限りがあることを踏まえた検討である。

言語能力、情報活用能力について専門的に議論すればするほど、肥大化した資質・能力が生み出されてしまうことを危惧している。子供たちが学ぶ時間は有限であり、学ぶ内容にも限りがある。全ての子供たちが生涯にわたって学ぶための基盤となる資質・能力を育成することに異論はないが、本当に「学習の基盤」足り得る、資質・能力のエッセンスを絞りこむことが必要と考える。

学習の基盤となる資質・能力の育成に向けては、教科等横断的な視点に立つことが大切であり、教科横断の取組が提起されてきた背景を遡ると、1996年7月の中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」がある。その答申を受けて、1998年の学習指導要領で「総合的な学習の時間」の誕生を見たわけであるが、答申で話題になったのが、イギリスの哲学者ホワイトヘッドの「…教えるべきことは徹底的に教えるべし」という言葉である。学習の基盤となる資質・能力も同様に、共通に学ぶべき内容を絞り込んだうえで、徹底して指導に臨むことにより、人生や社会に生きて働く資質・能力として育成されるのではないかと思う。

3点目は、①学習の基盤となる資質・能力の相互関係を意識すること、②それぞれの資質・能力を主としてどこで育てるのかという教育課程の構造を意識した検討である。一例として申し上げますと、「問題発見・解決能力」を支えるものとして、言語能力・情報活用能力を位置づけてはどうかと考えている。振り返ってみると、社会の急激な変化に対応して「生きる力」を育成しようと考えたのは、先程の1998年の学習指導要領であった。

そのときの学習指導要領で「生きる力」の育成の肝煎りとして創設された総合的な学習の時間では、社会的要請を受け止めつつ、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、それらが総合的に働くようにすること」などをねらいとしている。

こうした力は、今回の学習指導要領でいうところの「問題発見・解決能力」ではないかと考えている。そこで、社会に出て様々な問題に直面した時、それを解決していく力、それを支える重要な力として、言葉を使いこなす力という「言語能力」、情報を使いこなす力という「情報活用能力」があると捉えてはどうかと考えている。

例えば、国語科を中心に言葉を使いこなす言語活動を充実することで言葉を使いこなす力が確かなものとなり、総合的な学習の時間における「問題発見・解決」の過程がより確かなものとなったり、質的な高まりを見せたりしていくようになる。そうした過程で「言葉を使いこなす経験をすること」で、言語能力もより高まっていくと考えるわけである。

これは、あくまで一つの例としての提案であるが、学習の基盤となる資質・能力の検討に際しては、それぞれをバラバラに捉えるのではなく、①それぞれの資質・能力の相互関係を意識すること、②それぞれの資質・能力を、主としてどこで育てるのかというカリキュラムデザインの発想が求められるのではないかと思う。